

平成25年度「青少年を取り巻く有害環境対策の推進」(有害環境から子どもを守るための推進体制の整備)【ネットモラルキャラバン隊】

携帯電話やスマートフォンなどによるインターネット上のマナーや家庭でのルールづくりの重要性を、保護者等に対して周知するための有識者等によるキャラバン隊を結成し、全国で学習・参加型のシンポジウムやトークセッションなどを開催する。

(実行委員会の構成)

- 委員長  
曾我 邦彦 (社)日本PTA全国協議会元会長
- 副委員長  
尾花 紀子 ネット教育アナリスト
- 委員  
伊藤 一義 (社)日本PTA全国協議会専務理事  
石原 友信 安心ネットづくり促進協議会  
井上 真由美 株式会社ミクシィ  
小向 太郎 早稲田大学大学院
- オブザーバ 総務省消費者行政課

事業の概要

- ③普及啓発のための取組
- ・実施主体  
事業主管:文部科学省  
主催:株式会社情報通信総合研究所、都道府県・市町村PTA等。  
共催:安心ネットづくり促進協議会
- ・対象者  
保護者、教育関係者等(全国で4,000人程度)

事業のねらい

インターネット上のマナーや家庭でのルールづくりの重要性を周知するための有識者等によるキャラバン隊を結成し、全国(12ヶ所)で学習・参加型のシンポジウムやトークセッションなどを開催する。保護者等を対象に以下に示すようなインターネット上のマナーやルール作りを分かり易く周知する。

- ・インターネット・携帯電話の利用に関するマナー
- ・家庭におけるインターネット・携帯電話の使用に関するルール作り
- ・フィルタリングサービスの利用促進
- ・メディアリテラシー及び情報モラル教育の啓発等



事業の内容

本年度は、下記の12カ所にて、シンポジウム(講演、パネルディスカッション・トークセッション、ワークショップ等で構成)を開催した。

	開催地	開催日時	基調講演等	主催等
第1回	島根県出雲市	H.26年1月25日(土)	尾花紀子 先生	島根県PTA
第2回	福井県福井市	H.26年2月 1日(土)	尾花紀子 先生	福井県PTA
第3回	山形県山形市	H.26年2月 1日(土)	桑崎 剛 先生	山形県PTA
第4回	山口県山口市	H.26年2月 1日(土)	米田謙三 先生	山口県高校PTA
第5回	三重県尾鷲市	H.26年2月 9日(日)	藤川大祐 先生	三重県/尾鷲市PTA
第6回	奈良県王寺町	H.26年2月 9日(日)	竹内和雄 先生	奈良県PTA
第7回	福島県福島市	H.26年2月11日(火)	尾花紀子 先生	福島市小中PTA
第8回	香川県高松市	H.26年2月15日(土)	桑崎 剛 先生	香川実行委員会
第9回	神奈川県川崎市	H.26年2月18日(火)	佐和伸明 先生	川崎市PTA
第10回	福岡県福岡市	H.26年2月21日(金)	玉田和恵 先生	福岡県PTA
第11回	岐阜県各務原市	H.26年2月22日(土)	桑崎 剛 先生	各務原市PTA
第12回	宮城県宮崎市	H.26年2月23日(日)	尾花紀子 先生	宮城県PTA

本事業の問い合わせ先

株式会社情報通信総合研究所 社会公共システム研究グループ 松原・沼田 <http://www.icr.co.jp>

POINT1

■短期間実施の意義

正味1か月、という短期間で12か所の研修会を実施した。同時期の旬な話題について、強いメッセージ性を持って伝えられたと考えられる。

POINT2

■企業等との連携

安心ネットづくり促進協議会に参画するメンバー(SNS運営事業者等)に会場、登壇いただいたことで、今後の活動の橋渡しになりえた。

POINT3

■研修のバリエーション

12回の開催のうち、川崎市での研修会では、ワークショップ形式を展開した。少数精鋭で、内容の濃い研修を展開できた。

文部科学省委託事業「ネットモラルキャラバン隊」  
福島市小中学校PTA連合会 研修会



2014年2月11日(火) 福島県文化センター

<13時より受付開始> (敬称略)

13時30分~13時35分 <挨拶> 藤原 聡(福島市小中学校PTA連合会 会長)
13時35分~13時45分 <文部科学省 説明> 「子供の携帯電話やインターネットをめぐる問題に関する取組~有害情報から守るために~」 関根 章文 (文部科学省 スポーツ・青少年局参事官(青少年健全育成担当)付青少年有害環境対策専門官)
13時45分~13時55分 <総務省 説明> 「ソーシャルメディアガイドラインの普及促進について」 岡 元紀(総務省 東北総合通信局 情報通信部 電気通信事業課長)
13時55分~14時45分 <講演> 「ネットに依存しない子、ネットを買く安全に使える子を育てる」 ~今なにか起きているかを知り、なにができるのかを考えよう!~ 尾花 紀子(ネット教育アナリスト/安心ネットづくり促進協議会 普及啓発広報副委員長)
14時50分~16時00分 <パネルディスカッション> 「見えてきた!「青少年ネット課題」にどう向き合う?」 パネリスト:尾花 紀子(ネット教育アナリスト/安心ネットづくり促進協議会 普及啓発広報副委員長) 関根 章文(文部科学省 スポーツ・青少年局参事官(青少年健全育成担当)付青少年有害環境対策専門官) 遠藤 真理子(伊達郡川俣町立川俣小学校長) 工藤 陽介(デジタルアーツ(株)経営企画部 コンシューマ課 課長補佐) コーディネーター:曾我 邦彦(日本PTA全国協議会 元会長/安心ネットづくり促進協議会 副会長)

正味2時間半のシンポジウムのうち、前半は、行政説明(文科省、総務省)と有識者による「基調講演」、後半は、地元のPTA、教育委員会等も交えた「パネルディスカッション」「トークセッション」により構成。  
※川崎市での研修会では、ワークショップを開催。  
※左は「福島開催」の例。



事業の成果

●「ケータイモラル」から「ネットモラル」へ

ケータイやスマホといった、“電話機から派生したデバイス”以外にも、昨今では、携帯型ゲーム機や音楽プレイヤーを用いることで、無線LAN経由でのネット接続が可能となっている。昨年度までのタイトル「ケータイモラルキャラバン隊」が名称が変更され、今年度より「ネットモラルキャラバン隊」となったが、このような状況につき、「大人の知らない社会現象(スマホ以外でもネットに接続が可能なこと)」等を含め、様々な課題が全国の保護者に周知できたことは、ネットモラルキャラバン隊としてのひとつの意義だったと考えられる。

●企業との連携

ネットモラルを取り巻くサービスや技術の進歩のスピードが速く、高度化し、リアルタイムでの実態把握が難しくなっていることもあり、地域や一般の保護者だけでは、十分にこの課題に対応していくことが難しくなっている。そうした中、「企業と連携していくことは有意義だ」という声も、例年以上に多く聞かれた。今年度は、半分以上の開催地にて、企業の方々にもパネルディスカッション/トークセッションにご登壇いただいた。地域が次のステップのアクション(企業の出前講座を利用する等)を行う上でのきっかけづくりとして、ネットモラルキャラバン隊が果たした意義は、今まで以上に高かった、と考えられる。

課題と今後の展望

●子供の学齢やニーズ

ニーズに応じた研修会をすべて展開していくためには、午前と午後に分けて、対象に応じて、提供するコンテンツを変える、もしくは、分科会を開く等、きめ細かい研修スタイルを提供することが有意義ではないか、との意見もなされた。地域の状況や熟度、ニーズ等も勘案しながら、様々なスタイルの研修会が提供されることが望ましい。

●参加企業のフォーメーション

参加する保護者自身の子供の学齢等によって、ネット利用の状況や、それに応じたネットモラルの重要性は異なってくる。昨今は、スマホを持たずとも、大人の知らないうちに、携帯型ゲーム機や音楽プレイヤー等が、ネット接続機器として活用されているケースもあることから、今後は、携帯キャリアやSNS事業者だけでなく、ゲーム機メーカー等との連携も重要視されるのではないかと、との意見が出された。

# 中学生ワークショップ 「かしこく使おう！インターネット」(静岡県)

中学生がインターネット活用やリスク対策などを議論することで自分たちの課題を自分たちで考え、状況の改善に結びつけることを目的に「ネット依存」をテーマにワークショップを実施しました。また、ワークショップで出された意見をもとに「ネット依存度チェックアプリ」を制作し、多くの方が自分の使い方を見直すきっかけとなるよう公開しました。

## (実行委員会の構成)

静岡大学教育学部 講師  
静岡市教育委員会 主席指導主事  
静岡市PTA連絡協議会 会長  
総務省 東海総合通信局  
安心ネットづくり促進協議会  
静岡大学教育学部 大学院生  
特定非営利活動法人イーランチ

## 事業の概要

- ① 青少年を取り巻く有害環境対策の必要性周知と意識向上 → チラシ・ポスター配布とフォーラムの開催
- ② コミュニケーション能力とプレゼンテーション技能の向上 → ワークショップの実施
- ③ 家庭でのルールづくりの促進 → ワークショップの実施
- ④ 生活リズムの改善 → アプリ体験
- ⑤ 情報モラル教育の推進 → 学習プログラムの作成と配布

・ワークショップ対象者： 静岡市及び近隣市町の参加希望中学生  
・実施主体： 特定非営利活動法人イーランチ  
・協力： 静岡大学教育学部 塩田研究室

## 事業のねらい

スマートフォンをはじめとするインターネットに繋がりがやすい機器の普及やSNSの広がりによりインターネットの利用時間も増え、ネット依存の引き起こす生活習慣の乱れや健康被害も問題化している。日頃の啓発活動からもネットゲームが止められないといった親からの相談も後をたたない現状がある。そして買い与える保護者側も課題認識が低いと、買い与えるときのルール作り等、家庭の中で情報モラルやネット依存を考え学ぶ環境が整っていない。そこで、当事者である中学生を対象にワークショップを開催するとともに、成果であるアプリ体験やフォーラムを通し、青少年の安全なインターネット利用について考える機会を増やすことを目的に実施した。また事業に対し国・県・市教育委員会・大学・企業・市民団体が協働し取り組むことで「ネットのトラブルやネット依存から子どもを守る！」という強い姿勢を情報発信し、情報モラル教育の推進を図る。

## 事業の内容

中学生を対象に「ネット依存」をテーマに夏休みに2回のワークショップを実施した。そこでは静岡大学教育学部の学生がグループリーダーとなり、コミュニケーション力を向上させながら自由な意見や発想を導きだし、「依存の尺度」と「改善へのアドバイス」をまとめた。



ワークショップのデザインは、学校での情報モラル教育の方法の一つとなるよう学習プログラムとして県内の教育委員会などに配布した。

新たな試みとして、ワークショップで出された意見をもとに「中学生がつくったネット依存度チェックアプリ」を制作し公開することで、青少年がインターネットとの上手な付き合い方を考える機会を増やすとともに、インターネット利用時間、傾向を把握し生活習慣の改善につなげた。

保護者・教員・一般を対象に開催したフォーラムでは、基調講演と中学生によるワークショップの成果発表、アプリ体験を行うとともに、中学生から出された意見をふまえて参加者全員が「ネット依存」をテーマにラウンドテーブル(ディスカッション)を行った。大人自身も自分の使い方を見直すとともに青少年の安全なインターネット利用について考える場となった。

## 本事業の問い合わせ先

特定非営利活動法人e-Lunch(イーランチ)  
〒425-0092 静岡県焼津市越後島385番地 TEL:054-626-2100/FAX:054-626-8546  
ホームページ <http://www.npoelunch.jp> メール: [info@npoelunch.jp](mailto:info@npoelunch.jp)

## POINT1

「ネット依存」をテーマとした学習プログラムの作成と実践

子どもたちが主体的に学習するプログラムの設計。学校の授業に取り入れ易い内容として提案。

## POINT2

「中学生がつくったネット依存度チェックアプリ」の制作と公開



(内容の続き)

- 6月6日(木) 第1回実行委員会 計画  
7月17日(水) 大学生によるプレワークショップ(静岡大学塩田研究室)  
8月6日(火) 第1回ワークショップ「かしこく使おう！インターネット～ネット依存度チェックアプリをつくろう①～」  
8月24日(土) 第2回ワークショップ「かしこく使おう！インターネット～ネット依存度チェックアプリをつくろう②～」  
9月30日(月) 「中学生がつくったネット依存度チェックアプリAndroid版」公開  
10月5日(土) 「中学生がつくったネット依存度チェックアプリios版」公開  
10月12日(土) 第3回ワークショップ&フォーラム「かしこく使おう！インターネット」開催  
内容: 基調講演・中学生ワークショップ成果発表・アプリ体験・ラウンドテーブル  
1月31日(金) 第2回実行委員会 事業の成果検証&研修会「ネット依存の現状と対策」  
2月28日(金) 「ワークショップ型情報モラル学習プログラム かしこく使おうインターネット」教育関係機関へ発送

広報・募集: チラシ・ポスター  
静岡新聞・朝日新聞・ラジオ(FM-Hi!)ほか  
ワークショップ参加者数  
中学生 延べ30名・大人 延べ56名  
フォーラム参加者数  
中学生5名・大人82名  
アプリの使用者数(2月18日現在)  
iOS 4144/Android 3187 計7331

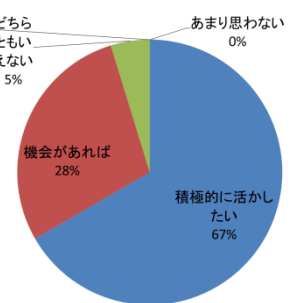


## 事業の成果

(参加者の声)

- 中学生の感想より  
・人によって価値観が違って、その中で自分が全く依存していないと言える人はほとんどいないのかもしれないと思いました。  
・他の人の意見を聞いて自分のインターネットの使い方を客観的に見ることができた。  
保護者・一般・教員の感想より  
・指導の方法として、それぞれの考え方、価値観を交流することで、自分にとっての常識が必ずしも、第三者にとって常識とは言えないことを自覚させることができるという効果的な方法を知ることができた。  
・保護者と子どもが共通の話題で話し合う事ができることが一番の依存度を下げる方法だと思いました。

ワークショップの経験を今後の活動で活かしたいと思いますか？(中学生)



## 課題と今後の展望

これまでのネット依存をはじめとする情報モラル教育は、一方的な講義形式で進められてきた。これに対しワークショップは子どもたちが主体的に自分の考えや意見を言うことで、他者との価値観のズレや自分では気づかなかった部分に気づけるという利点がある。今後もワークショップ形式での啓発活動の広がりを期待する。

また、「ネット依存」と一言と言っても個人差(程度)があることも認識することができた。マスコミなどにより極端な事例を目にすることはあったがワークショップを通じ、身近に感じることができた。「ネット依存」についての正しい知識と生活改善の必要性を周知する必要がある。

課題として、忙しい中学生の自主的参加は少数に留まった。一般公募による開催は様々な学校からの参加ということでコミュニケーション力向上の成果は期待できるが、参加者が少ない現状では学校単位での開催が望ましいとの意見もあがった。

# 青少年安心ネット・ワークショップ事業(島根県)

インターネット環境の整備に伴い、今や誰でも手軽にインターネットを利用できるようになった半面、「情報モラル」の欠如によりネットトラブルや犯罪等新たな社会問題も発生している。これからの子どもたちは「情報活用能力」と「情報モラル」の両論から学び、自ら考えて使用・行動する力を身に付けることが求められている。

## (実行委員会の構成)

島根県健康福祉部青少年家庭課  
 島根県教育庁義務教育課子ども安全支援室  
 島根県警察本部生活安全部少年女性対策課  
 島根県環境委生活部環境生活総務課消費と暮らしの安全室  
 島根大学教育・学生支援機構 生涯教育推進センター  
 島根県PTA連合会  
 隠岐の島町教育委員会  
 隠岐の島町小・中学校PTA連合会  
 (一社)モバイルコンテンツ審査・運用監視機構  
 (一社)安心ネットづくり促進協議会  
 (一社)ソーシャルゲーム協会  
 大阪私学情報化研究会  
 有限会社Willさんいん(事務局) 15名

## 事業の概要

- ・ワークショップの実施
  - ・ネットワークショップの実施
  - ・シンポジウムの開催
  - ・内容の見える化「パネル展示・情報発信」
- (対象・実施地域)  
 島根県隠岐郡隠岐の島町
- (実施主体)  
 青少年安心ネット・ワークショップ実行委員会
- (対象者)  
 島根県隠岐郡隠岐の島町の中学生  
 大阪私学羽衣学園の高等学校生  
 教職員・保護者・地域住民他

## 事業のねらい

子供たちの情報リテラシー・情報モラルの醸成には、保護者や教職員・指導員等の大人に向けて行うプッシュ型の講演会よりも、子供たちに課題を与えてグループで考えさせるワークショップ型の学びが大変有効である。前年度トライアル・サンプルとして隠岐島前地域三町村でワークショップを行なった結果見えてきた課題(ネットショッピングの利用、決裁)は、隠岐島前地域特有のものなのか、他の離島でも共通の課題なのか、島後地域でも同様のワークショップを実施することにより実証データの一つとなりうる。また、今年度は新たに大阪府内の高校生とインターネットを活用したワークショップを実施し、自分たちの今後の島内、島外生活をイメージしながら、インターネットの利活用について議論を交わすことによって、都市部と離島とのインターネットに対する考え方の共通点・相違点、その中にある問題点に気づき、解決策を自ら考えて行動出来るようになることを目指す。

## 事業の内容

### ◆青少年安心ネット・ワークショップの実施

日付	開催学校	対象者	人数
7月16日(火)	西郷南中学校	2、3年生	100
	五箇中学校	全校生徒	44
7月17日(水)	西郷中学校	3年A、B組	51
7月18日(木)	都万中学校	全校生徒	38

ファシリテーターとして、(株)DeNA、(一社)モバイルコンテンツ審査・運用監視機構、(一社)ソーシャルゲーム協会にご協力いただき、各グループに1名ファシリテーターを配置。生徒が意見を出しやすいようにサポートをしていただいた。生徒がまとめた3か条は、「時間を決める」「セキュリティをかける」「個人情報を公開しない」というルールが多く挙げられた。

### ◆ネット・ワークショップの実施

- ・日時:平成25年8月22日(木)14:00~17:15
- ・会場:隠岐島文化会館と大阪羽衣学園
- ・参加者:隠岐島後地域4中学校の生徒会役員13名と大阪府内の高校生10名
- ・ファシリテーター:
  - (大阪)・羽衣学園 米田謙三先生
  - ・株式会社ガイアックス 柳沢氏
  - ・株式会社DeNA 浅川氏
  - (隠岐)・株式会社DeNA 山田氏
  - ・(一社)ソーシャルゲーム協会 朝倉氏
  - ・(有)Willさんいん 長谷川、金築、柴田
  - ・(株)アイ・サーブ



【本事業の問合わせ先】 有限会社Willさんいん

住所: 〒690-0003 島根県松江市朝日町498 松江センタービル8F

電話: 0852-28-6220 FAX: 0852-28-6223 Webサイト: <http://www.will3in.jp/>

## POINT1

◆青少年安心ネット・ワークショップの実施

隠岐の島町の全校生徒にワークショップを実施。

インターネットの良い点・悪い点・対応策と、自分たちのインターネット利用「3か条」を考える。

## POINT2

◆ネット・ワークショップの実施

今年度は、Skype等インターネットを活用したワークショップを実施し、普段直接交流できない都市部の子どもたちと積極的な意見交換を実施、都市部と地方の違いについて気づきを得る。

## POINT3

◆シンポジウムの開催

隠岐郡隠岐の島で開催  
 ・基調講演  
 ・生徒によるワークショップ成果発表  
 ・ソーシャルゲーム運営会社によるプチ講座

### ◆シンポジウムの開催

家庭で作ろう！ネット利用のルール

・日時:平成26年1月19日(日)14:00~16:30

・会場:隠岐島文化会館 大ホール

・内容

#### ①基調講演

「危ないから使わない！」から“上手に使う”へ

ースマホ、ネット、ICTの正負を知り、正しく使える大人になるためにー

講師:大西久雄氏(越谷市大袋中学校 校長)

#### ②生徒による！ワークショップ成果発表

1. 西郷中学校
  2. 西郷南中学校
  3. 五箇中学校
  4. 都万中学校
  5. 羽衣学園高等学校・・・LINEの既読スルーをテーマにした寸劇を実施
- 7月、8月に行ったワークショップを振り返り、各学校ごとにルールを発表

#### ③ソーシャルゲーム会社によるプチ講座

「スマートフォンを上手に活用するために、インターネットについて知ってほしいこと」

講師:金子 哲宏氏(株式会社ディー・エヌ・エー マーケティング本部 広報部 部長)



## 事業の成果

今年度、新たな試みとして実施したネット・ワークショップでは、隠岐と大阪をネット(Skype)で繋いでワークショップを実施。インターネットの利用方法は、「買い物」、「SNS」などの意見が多く、注意点としては、「個人情報公開しない」、「困ったときは大人に相談する」などの意見があり、隠岐の学生・大阪の高校生共に利用方法に大きな違いはなく、インターネットの利用に関しては都市部も地方も違いがないということが再認識できた。また、隠岐の中学生にとっては、普段直接交流することのできない大阪の高校生との意見交換がとても良い刺激となり、生活の違い・文化の違い等、価値観の違いについて気づきを得られた。シンポジウムでは、隠岐の島町PTA連合会研修会と連携して実施したため、多数の保護者の参加があり、保護者への意識啓発につながった。

### ※シンポジウムの感想

「中学生が思った以上にPC、スマホを使いこなしていて、情報教育の大切さを痛感した。また、どの中学校も「親と相談して」ということを約束としてあげられているので、親として無関心ではなく、子どもを見守っていいことと思いました。(保護者)

「中学生の発表、他地域の高校生の提言があり、とてもよかったです。使ったらダメと言うだけでなく、一緒に話して考えることも大事なかなあという考えに今日の研修を通して変わりました。(保護者)

## 課題と今後の展望

隠岐の子供たちのネット事情は、離島と言うことから、各家庭で早くからネットを利用して情報収集及びネットショッピングをしていることがわかった。ワークショップ事前アンケート結果から、離島特有として公共交通機関が殆どなく、休日に中学生一人で行くことが困難であること、娯楽が少ないことから、休日のほとんどをネットをして過ごす生徒が多くみられ、首都圏の子供たち以上にネットを使いこなしている生徒もいた。一方で家庭内でルールがあると答えた生徒は各学校5%未満だった。さらに、昨年度の島前地域と同様にネットショッピングを自由に行っている生徒が多く中には決済権を持っている生徒もいたこともあり、消費者教育の必要性を更に感じた。昨年度の島前地域との違いは、島後地域には隠岐空港があり、伊丹便が飛んでいることから夏季シーズンには関西方面から多くの観光客が訪れ、隠岐の島町の子供たちも関西方面との交流に慣れているわりに危機管理意識は島前地域同様に低い。例えば、LINEで知らない人へ自分の使っているインターネットサービスのIDとパスワードを教えた生徒がいた。何故知らない人に教えたのか尋ねると、「会ったことないけど、写メを送ってくれたし、その人が自分のIDとパスワードを先に伝えてきたので教えてあげないと悪いと思った。」「隠岐には悪い人はおらん」等の声が聞かれ、自然豊かな環境と自宅に鍵をかける人が少ない無防備さがより危機管理意識を低くしているのではないかと推測出来る。(悪い人に出会うことが想像できない)地方の青少年に対して、地域の大人も含めてネット利用の危機管理意識をどう高めて行くのが課題である。

# スマホで命を守る(熊本)

スマホ1台で、電話、メール、SNSができる環境で、子どもにスマホを扱う際に伝えるべきことは何かについて実行委員会で検討してきた。もっとも大切なことは、命に関わる危険につながる点、そして逆に自分や他者の命を救うことにもつながるということである。本事業では、発達段階に応じた参加型ワークショッププログラムを企画・実施した。

## (実行委員会の構成)

桑崎 剛 実行委員長  
本村 真也 実行委員  
山本 英史 実行委員  
西岡 智洋 実行委員  
水野 直樹 実行委員  
岡田 行雄 実行委員  
松川 由美 実行委員

加藤 千尋 事務局

## 事業の概要

- ①実行委員会方式で、子どもとスマホの現状を検討し、発達段階に応じたプログラムを立案、検討した。
- ②第1回ワークショップのテーマは「ネットいじめ」として、小学校6年生を対象に、地域、PTA、学校と連携して実施した。第2回ワークショップのテーマは、「ネットと防災」として、中学生を対象に、地域、PTA、学校と連携して実施した。
- ③実施プログラムはDVD化し、情報モラル教育に取り組む地域団体や学校へと配布し、本プログラムの活用を促すようにした。

## 事業のねらい

- ①スマホ利用に関するワークショップ開催を通して、スマホ利用に関するルールや危険性を共有する。
- ②主体的にスマホ利用に関するルールや危険性を共有することができるワークショッププログラムを完成させ、中高生自らが行えるようにする。
- ③災害時におけるスマホ活用に関するワークショップを通して、災害時における活用方法を共有する。
- ④災害時におけるスマホ活用に関するワークショッププログラムを完成させ、中高生が家庭内の家族や仲間内とともにスマホによる災害対応について取り組めるようにする。
- ⑤②、④のような環境をつくりだすためワークショッププログラムを冊子および電子媒体として制作し配布する。

## 事業の内容

本事業において、「ネットいじめ防止プログラム」(小学生高学年対象)と「ネットと防災プログラム」(中学生対象)の2つのプログラムを実施した。

「ネットいじめ防止プログラム」は、以下のように気づきから問題解決の行動へとつながるような流れのある構造化されたプログラムです。

- 1) ネットいじめについて共通理解をする
- 2) ネットいじめの問題を分析する
- 3) ネットいじめの問題解決を考える
- 4) いじめ予防のために行動を身につける

このプログラムを実施することによって、子どもたちはネットいじめの種類やいじめを理解するために重要な「いじめモード」という考え方を学びます。また自分自身がスマホを扱うための指針について話し合い、参加者同士が発表することで全体の指針として共有されます。そして一人一人が、いじめ解決のための具体的な行動やコミュニケーションの取り方を身に付け、明日からの生活場面ですぐに役立つようになっています。

プログラムは、4つの活動で構成されています。

活動①「ネットいじめを見抜け」 ②学級新聞づくり ③「いじめモードになった時」 ④「目玉焼き事件」

これらの活動を通して、一人一人が、いじめ解決のための具体的な行動やコミュニケーションの取り方を身に付け、明日からの生活場面ですぐに役立つようになっています。



## POINT1

命に関わる「いじめ」「防災」をテーマにすることでどの子どもにとっても身近に感じられるようにした。

子どもと大人(ファシリテーター)が安心してリラックスした環境の中で、テーマに関して率直な意見交換ができる機会をもっとつっていきべきだろう。

## POINT2

どの子どもであっても、構造化された流れのある活動を体験することによって、自ら考え、意見を言い、他者の意見を聞くことができる。

子どもたちの参加度が高まるように活動には、スライド、付箋、体験、新聞、動画、パネルなど多くの工夫を入れた。

## POINT3

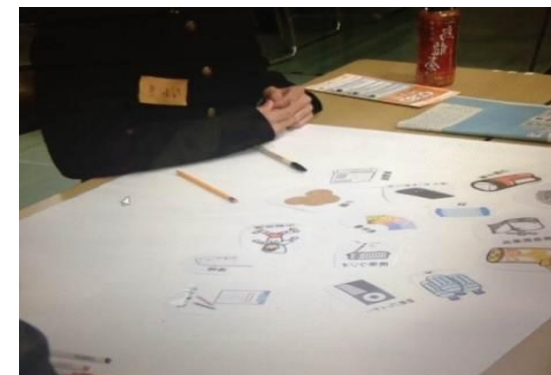
参加型ワークショップで大切な点は、話し合いや活動から得られた学びを、一人ひとりが考えどのように行動の変容にむすびつけるかである。いじめへの対処法、コミュニケーションの取り方、情報の発信受信で気を付けるべき点などを身に付け、満足度も高いことがわかった。

(内容の続き)「ネットと防災プログラム」は、子どもたちが情報の受信者、発信者になり得ることについて主体的に考え、その延長としてスマホの扱い方についても自ら提案していくように構造化されたプログラムとなっています。

- 1) 防災について共通理解をする
- 2) 災害時における情報獲得の重要性を分析する
- 3) 災害時における情報の問題を理解する
- 4) 災害時に情報発信者となるために行動を身につける

このプログラムを実施することによって、子どもたちは災害時に適切な情報獲得の重要性を学びます。また自分自身がスマホを使って情報を発信する場合の指針について話し合い、参加者同士が発表することで全体の指針として共有されます。

活動①災害ってどんなもの? ②その時、あなたは何かを持っていく? ③スマホで災害の情報をつかもう ④災害時のデマ情報 ⑤正しい情報の発信について一人一人が、災害時に適切な行動をとるために具体的なコミュニケーションの取り方を身に付け、明日からの生活場面ですぐに役立つように構成されています。



## 事業の成果

(ワークショップの成果)

- ・(第1回WS) (スマホのアプリで中傷が広まった場合)こちらスマホでみんなに「(悪く言うのは)やめようよ」と呼びかけていく。
- ・(第2回WS) 自ら発信できる情報として、自分や周りの人の安否情報・避難場所についての情報・地域の様子やきめ細かい災害情報・危険な場所、危険力所・避難路の様子、交通情報などができると認識した。(参加者の声 アンケートより)
- ・(第1回WS)5種類の(ネット)いじめの種類があったのでビックリした。スマホは便利なものだけど、悪いことに使ってはいけないと思った。スマホについてちゃんと考えてみようと思いました。
- ・(第2回WS)5W1Hを考えて発信受信をしなければいけないということがわかりました。自分が発信する時もあるから正確に主語などをつけて信頼性を持たせられるようにしなければいけないと思いました。情報についてよく考える機会がありよかったです。

## 課題と今後の展望

・課題

参加型ワークショップの実施には、内容を熟知したファシリテーターが複数必要であり、その人材の育成と実施にかかる費用負担である。情報モラル教育は、デバイスの開発が著しく学校教員だけが伝えていく性質のものではないと感じる。「いじめ」「防災」といった命に関わるテーマはより多様な大人が関わり、地域全体で推進していくべきことだろう。最も大切な点は、このプログラムを中心的に担う団体、人材が必要だと感じている。

・今後の展望

保護者も学校も最近の情報機器にはなかなかついていけないことができない中、きちんとスマホの危険性と活用方法を伝えることを急務だと言える。子どものアンケート、保護者の評価も非常に高く、今後の継続を望まれている。来年度も事業資金を獲得しながら本事業で作ったプログラムを熊本県内を中心に展開していく予定である。

● 本事業の問い合わせ先 青少年安心ネット・ワークショップ実行委員会

● 事業受託団体・事務局 NPO法人しぜん あそ・まな・くらぶ

● 〒862-0956 熊本県熊本市中央区水前寺公園4-20 水前寺椿ビル203

● 電話: 096(213)6133 FAX: 096(213)6134 電子メール: info@asomana.net

## スマホ時代の中高校生ネット教育プログラム

# SSP(Smart Student Program) (福岡県)

学校の授業時間2校時×3回を使って行うワークショップ型プログラム。当法人の15年に渡る実践研究から、スマホが利用者に要求する能力と現代中高生の能力のギャップを埋めるトレーニング、スマホ社会に中高生が対応していく上で必要な視点を提供する。クラスの仲間との関わりの中で生徒自身が「賢い生徒」である力を身に付ける。

### ●NPO子どもとメディア

清川輝基(代表理事) 古野陽一(専務理事)  
和田貴美子(常務理事) 黒田可奈子(事務局長)

### ●行政

三島正浩(福岡県新社会推進部青少年課指導係長)  
馬場伸一(福岡市教育委員会生涯学習課課長)

### ●学校

新開哲士(筑紫野市立筑山中学校校長)

### ●企業

吉田拓巳(現役高校生IT系企業経営者、VJ)  
置鮎正則(メディアリテラシー教育事業者)

### ●実践者

荒牧直子(中学生保護者、子どもとメディアインストラクター)  
酒井貴子(高校生保護者、子どもとメディアインストラクター)

## 事業の概要

### ①SSP開発

・研究成果に基づいたワークショップおよびツールを開発  
・小規模な試験実施を経て実践的プログラムへ発展

### ②SSPファシリテーター養成

・21名のファシリテーターを養成

### ③SSP実践

・中学校2学年5クラスでの実践(2校時×3回×10クラス)

### ④子どもとメディア全国フォーラムの開催

「スマホ社会の子どもたち～その危険と可能性～」  
・専門家、実行委員、SSP参加者、大学生をまじえたラウンド  
トーク(300名参加)  
・参加者にSSPを体験してもらうワークショップ(160名参加)

## 事業のねらい

スマホの普及により、中学・高校でのネットトラブルが格段に増加している。スマホは非常に高い社会的能力(対話力、対人関係能力、状況判断力、問題対応力、社会的責任能力等)および強い自己コントロール力を要求する道具であり、本来はこれらが十分成長した時点で持つべきものである。しかし2013年度の当法人調査では、高校1、2年生のスマホ所持率は9割に達し、中学生のネット接続音楽プレーヤーを合わせた所持率は5割を越す。しかも、現代の中高校生、特に乳幼児期、学童期の育ちの中でメディア依存度の高い子どもは、社会的能力や自己コントロール力が低い傾向にあり、加えて自己肯定感が低く、自己表現が苦手、家族との関係が希薄といった傾向もある。能力ギャップが生じており、トラブルは起こるべくして起きている。この現実と正面から取り組むには、これらの基礎力を向上させる学習が必要である。生徒はSSPの中で、基礎力を向上する言葉のトレーニングを行い、人との関わり方、スマホ・ネットとの関わり方、現在の自分の生活、将来の展望などを、クラスの仲間と言葉を使って考える。それによって、生徒自身の力で、適切な人との関わり方、スマホ・ネットへの関わり方を見出せるようにしている。子どもとメディア全国フォーラムでは、本事業の成果を広く社会に発表する。

## 事業の内容

### ①SSP開発

特定の価値観を教示せず、当事者同士が安心できる環境でテーマに沿って語り合い、一人一人がそれぞれの解を見出す非誘導型のワークショップを基本とする。この手法は自己肯定感、自己表現力が高まり社会的能力が向上する。内容はスマホ・ネット社会に必要な力を段階的に深く考えられるように設計した。

8月に12人の中学生を集めて試験実施した際に、「言葉を考えて発する」「自分の考えを伝える」「話し合いを進める」といった力が想定よりかなり低く、「ことば遊び」、「連想ゲーム」、「単語作文」など楽しんで言葉の力を付け、自己表現しやすくする仕組みを入れた。

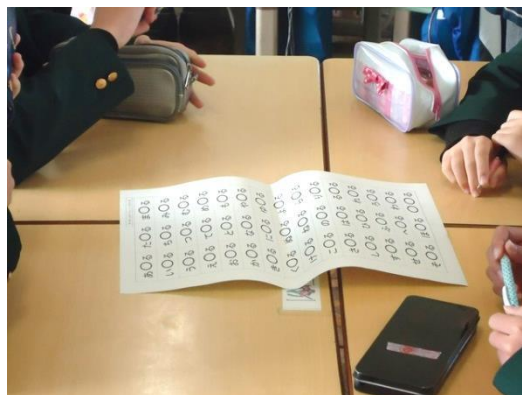
### ②SSPファシリテーター養成講座

同時5クラス2学年並行の実施が決まり、それに対応できるよう9月から10月に掛けて21名のファシリテーターを養成する講座を行った。いずれも子どもとメディアインストラクターかファシリテーター経験のある人材を登用した。基本理念、ファシリテーターとしての関わり方、プログラム進行の基本、疑似セッション等を2日間の体験型講座でトレーニングした。メインファシリテーター6名、サブファシリテーター15名で、1クラスをメイン+サブ1名以上の体制を整えた。

しかし、疑似セッションを通してプログラムの詳細を、ファシリテーターとともに作り上げていく必要があったので、さらに実施前に2回、実施中に2回のプログラム検討ミーティングと疑似セッションを追加で行った。

### ●本事業の問い合わせ先

特定非営利活動法人 子どもとメディア ホームページ <http://www16.ocn.ne.jp/~k-media/>  
メール k-media@dolphin.ocn.ne.jp TEL 092-724-6323 FAX 092-403-6262  
〒810-0042 福岡市中央区赤坂1-2-7 みずほビル703



## POINT1

### ●SSPの目的と形式

○目的  
スマホやネットの使い方を自分たちの今と未来のために自分たちが考えて自分たちで決めていく  
○形式  
学校のクラス単位で行う  
1回2校時3回連続  
非誘導型ワークショップ

## POINT2

### ●基礎的な力を養成

①考えて言葉を発する力  
②自分の考えを人に伝えるように表現する力  
③自分と異なる考えを受け入れる力  
④言葉で人と理解し合う力  
⑤自分のことを振り返る力  
⑥自分の未来への影響を想像する力  
ことば遊び、ゲーム等で楽しく養成

## POINT3

### ●スマホ社会を仲間と熟議

スマホ社会を生きるのに必要なテーマをクラスの仲間と話し合う  
①価値観の尊重  
②プライバシーの保護  
③スマホ・ネットの力とリスク  
④自分のやりたいこと  
⑤時間の使い方  
⑥自分の向上とスマホ・ネット

### ③SSP実施

福岡県筑紫野市立筑山中学校1年生5クラス、2年生5クラス計10クラスで実施。

○1回目(2年11月9日、1年11月21日)

ことば遊び「あ〇る」/価値観の尊重とプライバシーの保護/スマホ・ネットでできること/こんな時どう使う/大人が考えるリスク/嫌なこと・困ったこと体験/スマホ・ネットの力とリスクの関係

宿題 昔の中学生(保護者)にインタビュー「こんな時どうしてた?」/自分の好きなこと・やりたいこと

○2回目(2年11月21日、1年12月6日)

ことば遊び「あ〇い」/昔の中学生/小学生のとき好きだったこと/今、好きなこと・やりたいこと/やりたいことセルフーナメント/やりたいことに使っている時間/放課後の時間の使い方

宿題 放課後の時間の使い方の実際/自分レベルアップ

○3回目(2年12月17日、1年12月17日)

ことば遊び「あ〇〇る」/みんなの時間の使い方/自分レベルアップとスマホ・ネットの役に立つこと、妨げること/3回の振り返り/後輩へのアドバイス/自分自身への宣言

### ④子どもとメディア全国フォーラム(2月22日、23日一部)

○基調講演「ひとりが怖い～ネットコミュニケーションの光と影」

筑波大学人文社会系教授 土井隆義

○子ども・若者・大人のラウンドトーク

～良くなる?悪くなる?スマホ社会～

子ども・若者 吉田拓巳(高校生IT起業家、VJ)、大学生2名

ネット依存サバイバー、SSP参加中学生6名

大人 土井隆義、清川輝基、置鮎正則、内海裕美(日本小児科  
医会子どもとメディア委員会担当常任理事)

○体験版! 中高生のネット教育プログラムSSP

体験版ワークショップ

実践報告 的場浩二(筑山中学校教諭)、遠藤美季(エンジェルズアイズ代表)、SSPファシリテーター2名



## 事業の成果

### ●SSP後の生徒・学校の変化(的場教諭より)

・ネットトラブルがかなり起きていたが沈静化した。発生しないわけではないが、発生しても早期に生徒から教師に相談があるようになり大きくなる前に収束できている。

・生徒が自分の意見を述べることや生徒同士で話し合いをすることを楽しく感じている様子。SSP後ディスカッションを取り入れた授業に積極的に参加し議論が活発になった。

・地域のまちづくり事業で意見を求められた生徒たちが、小学生も入れてワークショップを行い、地域の大人に子どもたちの意見をしっかりと伝えていた。

・学校の中で自分の意見を言ってもいいんだという雰囲気が出て来た。

### ●ラウンドトーク参加者の感想より

・子どもたちの生の声が聞けて良かったです。もっと子どもの生の声を聞かなければと思われました。

・若者の「体力は重要ではない」と言う話にうなずいてしまいました。それも含め世代間の常識がかなり違うのかなと思いました。

・大人側の前提がズレることがわかる内容でした。(中略)大人側が何を不安と思い、悪いと考えているのか整理すべき。

## 課題と今後の展望

・単にネットモラルの学習ではなく、学校の中で生徒の社会的能力向上を図る2校時3回連続講座としたことで、生徒の対人関係能力や規範意識の獲得に高い効果が得られ、学校運営にもプラスになった。

・現在の中学校、高校の教育課程でこのような内容の講座に6校時を取ることは困難がある。しかし、社会的能力向上が現代の中高校生に必要な課題であることは、新教育課程でも謳われていることであり、学校教育にSSPのようなプログラムを積極的に取り入れることを社会全体に訴えていかねばならない。

・生徒の状況はちょっとした出来事で大きく変わるので、ファシリテーターが安定して「生徒が安心して自分の意見を言える場」を作りだすには相当の技能が求められる。ファシリテーターの習熟を補うプログラム構成とサポート体制が求められる。プログラムのもう一段の改善が求められる。

・高校では生徒自身がファシリテーターとしてプログラムを実践する方法を模索する。